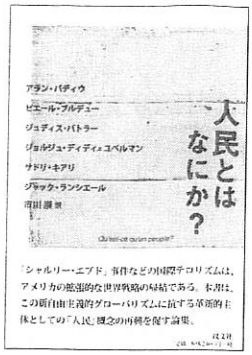
アラン・バディウ、ピエール・ブルデュー、ジュディス・バトラー、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン、サドリ・キアリ、ジャック・ランシエール著

人民とはなにか？

人民とはなにか、いったいだれが人民の名に値するのか――万人だ、と答えるなら、その全体を把握できる者は、だれひとりとしていないだろう。毎秒に生まれては死んでいく人間の全体を、どうすれば知ることができるというのか。もし人民の範囲に境界を引くのなら、どこで引かれ、だれが引くべきなのか。年齢で、能力で、血統で、居住地で、出生地で、財産で、証明書でと、なんであっても、たえず変化し移動し混淆していく人間を異論なく区別できる者は、だれひとりとしていないだろう。この捉えどころのなさは、本書で「人民」「民衆」「大衆」「民族」「国民」等と訳し分けられている「peuple」の多義性に、はっきりとあらわれている。問題は、この多義語が政治の文脈で発せられるときだ。だれも全体の意味をめぐって、人民のイメージを争って、政治が展開されているかのようである。



四六判・228頁・2400円
以文社
978-4-7531-0325-6

本書には、今日の政治と社会をめぐって積極的に発言してきた六人の論考、アラン・バディウ「人民」という語の使用に関する二四の覚え書き」、ピエール・ブルデュー「「大衆的（人民の）」と言ったのですか？」、ジュディス・バトラー「われわれ人民――集会の自由についての考察」、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン「可感的にする」、サドリ・キアリ「人民と第三の人民」、ジャック・ランシエール「不在のポピュリズム」が集成され、それぞれに上述のごとき「人民」の多義性の政治的効力が考察されている。

政治哲学や社会学で名の知れた著者たちに混じって、美術史家のディディ＝ユベルマンが寄稿しているのは、少し意外かもしれない。とはいえ、このところ「歴史の眼」シリーズで、政治実践がイメージや想像力を支えにして展開するさまを追いかけてきたディディ＝ユベルマンは、その第四巻『露出される人民、形象化する人民（写された人々、エキストラの人々）』（二〇一二）として、すでに人民のイメージの問題を論じていた。本書の論考「可感的にする」はその延長にあって、とくにイメージが感情を揺さぶる力をもつ点に着目しながら、人民がどのようにイメージされ、かつイメージにいかにみずからを刻み込むのかということと自体を、政治的駆け引きの根底に位置づけていく。

つまるところ、人民をどのようなイメージとしてあらわすのか、人民がどのようなイメージとしてあらわれるのか、それ自体が政治をなす。ランシエールも言うように、単数形で考えられた人民などは存在せず、相違し、対立さえする複数の人民の形象があって、それらのあいだで係争が繰り広げられる。この意味で、ブルデューが称賛にも蔑称にもなる「ポピュラー」の語の両義性を問題にし、キアリが「人民はなにに抗して形成されるのか」と問いかけているのは、示唆的だ。その全体を把握しえない人民であればこそ、だれもがイメージにもとづいて人民の意志を、世論を、国民感情を、時代の趨勢を、引き合いに出せる。だが、そのイメージはいかにして説得力をもつのか。人民のイメージはだれに対して、だれに抗して、呈示され、だれを説得しようとするのか。

序にあるように、本書そのものが、この人民という多義語のイメージをめぐる駆け引きに介入しようとの論争的意図をもっている。言葉とイメージこそが政治の支点にして争点なのだとすれば、本書を継いで、あるいはときに本書に抗して、なおも忍耐づよく言葉とイメージを紡ぐことこそ、本書の正当な読解であり、いまなすべき政治の実践であるだろう。（市川崇訳）（おかもと・げんた氏をなす。ランシエールも言＝岡山大学准教授・美学専攻）

いまなすべき政治の実践とは

「人民」の多義性の政治的効力を考察

岡本　源太

★アラン・バディウは現代フランスを代表する哲学者・作家。国立高等師範学校フランス現代哲学国際研究センター所長。一九三七年生。

★ピエール・ブルデュー（一九三〇～二〇〇二）は社会学者。アルジェ大学、国立社会科学高等研究院を経てコレージュ・ド・フランス教授。

★ジュディス・バトラーはカリフォルニア大学バークレー校教授・修辞学・哲学専攻。一九五六年生。

★ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンは美術史家・哲学者。国立社会科学高等研究院准教授。一九五三年生。

★サドリ・キアリは政治学博士・共和国原住民運動の創設者。一九五八年生。

★ジャック・ランシエールは哲学者・パリ第八大学名誉教授。一九四〇年生。

「週刊読書人」2015. 9/4（金）